

女人大蛇に婚はれ薬の力に頼りて命を全くすること得
縁 第四十一

河内国更荒郡馬甘里に、富める家有。家に女子有り。大炊天皇の世の天平宝字三年己亥の夏四月に、其の女子桑に登りて葉を摘く。時に大蛇有り。女の登る桑に纏りて登る。路往く人見て嫌に示す。嫌見て驚き落つ。蛇また副ひて墮ち、纏りて婚ひ、慌迷ひて臥す。父母見て、薬師を請召ぶ。嫌蛇と俱に、同じき床に載せられ、家に帰り庭に置かる。稷の藁三束を焼き三尺を束と成し三束とす、湯に合せて汁を取ること三斗、煮煎て二斗と成、猪の毛十把を

刈み末きて汁に合す。然うして当の嫌の頭と足とに楯を打ちて懸け釣り、口を開きて汁を入る。汁一斗入るれば、すなはち蛇放れ往き、殺して棄つ。蛇の子白く凝りて蝦蟆の子の如し。猪の毛蛇の子の身に立ちて、閻より出づること五升ばかりなり。口に二斗入るれば、蛇の子みな出づ。迷惑へる嫌すなはち醒めて言語ふ。二親問へば、答へていはく「我が意夢の如し。今醒めて本の如し」といふ。薬を服むことは是くの如し。何ぞ謹みて用ざらむ。然うして三年を経、彼の嫌また蛇に婚はれて死ぬ。愛ふる心深く入らば、死に別るる時に、夫と妻と父母と子とに恋ひて是の言を作していはく「我れ死なば、またの世にかならずまた相はむ」といふ。其の神識は業の因縁に従ひて、或るは蛇馬牛犬鳥の等さらに生る。先の悪しき契に由りて、蛇に愛ひ婚はれ、或るは怪しき畜生にせらる。愛欲一にあらざ。経に説きたまふが如し「昔仏と阿難と墓の辺より過ぐ。夫妻二人共に飲食を備け、墓を祠り慕ひ哭く。夫は母を恋ひて啼き、妻は嬰を詠ひて泣く。仏妻の哭くを聞きて音を出して嘆きたまふ。阿難白して言さく「何の因縁を以ちてか如來嘆きたまふ」とまうす。仏阿難に告げたまはく「是の女、先の世に一の男子を産み、深く愛ふる心を結び口に其の子の咽を嚙ひき。母三年を経て、儼然に病を得、命終る時に臨みて、子を撫でて咽を暖ひ

第四十一縁 今昔物語集二十四ノ九に書承。

更荒郡は讃良郡とも表記する。大阪府四條畷市、寝屋川市、大東市、あたり。馬甘里は未詳。六七九年。

七「桑は男女の情事に関連する(石田英一郎)。

八猪は蛇を制する(南方熊楠)。

九松浦貞俊の説による。今昔をはじめ「開」の口にと解する通説では、下文の「口入二斗」に合致しない。

二「女性性器」。「閻」は、戸ぼそ(建造物の入り口の上下にあつて扉の回転軸を受ける穴)を意味する「閻」の異体字。

三原文「何謹不用。薬を用いることに慎重になつてしまつて薬を用いない、などということがどうしてあるのか。薬を用いるべきである。」

四原文「愛心深入」以下「愛欲非」まで、業因に關しての一般論が展開される。

五原文「恋於夫妻及父母子」。夫と妻とが互いに恋ひ、父母と子とが互いに恋ひ。

六原文「復世」。この次の生涯。来世。仏足石歌「二に麻多乃与」がみえる。

七来世での再会を誓つたことをさす。

八原文「蛇愛婚、或為怪畜生」。被动。「蛇に愛ひ婚はれ、或るは怪しき畜生に愛ひ婚はる」の意。

九未詳。

一〇夫は自分の母を慕つて哭き、妻は自分の嬰(こ)を慕つて哭いている。上文に、夫妻が互いに慕つて哭いていることが述べられていた。ところが、夫と妻とのそれぞれの心情は、じつはこのようなものであつた、と述べられる。「し

のふ」の表記を「慕」「恋」「詠」と変化させ、「なく」の表記を「哭」「啼」「泣」と変化させてゐる。

一一「中巻十一縁」。

一二原文「臨命終時」。仏典語。

て斯^かく言^いはく『我れ生^よ々世^よ々に、常に生れて相^あはむ』といひき。隣^りの家の女^{むすめ}に生れ、終^{つひ}に子の妻^めと成^なり、自^{おの}が夫^{はね}の骨^{まつ}を祠^{まつ}りて、今^{しの}慕^なひ哭^なく。本^{もと}末^{すゑ}の事^{こと}を知^しり、故^{このゆゑ}に我れ哭^なくのみ』とのたまふ』とは、其^それ斯^これを謂^いふなり。また経^{きん}に説^{せつ}きたまふが如^{ごと}し「昔^{ひと}人の児^こ有^あり。其の身はなはだ輕^{かろ}く、疾^{はや}く走ること飛ぶ鳥の如^{ごと}し。父常に重^{おも}し愛^うびて守^{まも}り育^{やし}ふこと眼^{まなこ}の如^{ごと}し。父子^{ちちこ}の輕^{かろ}きを見て譬^{たと}へて言^いはく「善^よきかな、我が児、疾く走ること狐^{きつね}の如^{ごと}し」といふ。其の子命^{いのち}終^はりて後^{のち}に狐の身に生^うまふ。善^よき譬^{たとへ}を願^{ねが}ふべし。惡^あしき譬^{たとへ}を欲^{ねが}はざれ。かならず彼^その報^{むく}を得^えるが故^{ゆゑ}なり」と。

一 自分の前生での夫。

二 過去世における業因と、現在世におけるその報果と。

三 未詳。

四 上文には「疾走如^ニ飛鳥^一」とあった。上卷二縁には狐の子に關して「走疾如^ニ鳥飛^一矣」とみえる。
五 発せられた「ことば」は「ことがら」として實現される、という考えにもとづいている。
六 因果応報の思想とは異なる。